

レポート

# こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

## Vol.11 / 大学の中に山ができた！

～ 出会いの中で物語が生まれる ～

宮里 暁美



### 理想を抱き、語るいとの意味

幼児期の教育は環境による教育です。「環境」には、物的環境と人的環境があり、子どもたちが出会おうすべてのものを「環境」と呼ぶことができます。しかし、もう少し限定して環境を捉えたとしたら、それは「場」と言い換えることができるように思います。子どもたちが過ごす場所としての環境です。今回は、「場」に限定した環境について考えてみたいと思います。

本園には狭く平坦な園庭しかありません。子どもたちが過ごす場所として、それはとても貧弱なものに思えました。さまざま遊びを誘発し体の諸機能を発達させることができる場所に必要な要素（広さ・高低差・隠れる場所・木立・自然との出会い）に欠けているのです。このような環境の中でより良い保育は可能なのだろうか、という問いが重くのしかかってきました。

宮里 暁美（みやさと あけみ）

お茶の水女子大学文教育学部子ども学コース教授。  
文京区立お茶の水女子大学こども園園長。

しかし、新しくこども園を構想する際に、私たちが繰り返し語りあったことは「理想」

でした。どのような保育を行いたいのか、子どもたちとつくり上げたい遊びや生活はどのようなものか等々、最も大切な根本の思いを確かめあいました。準備が進み、敷地面積が狭いなど厳しい現実が見えてきたときでもなお、私たちは理想について考えることをやめませんでした。それは次のようなものでした。

- ①大学キャンパスは変化に富んだ豊かな自然と出会うことができる。本館中庭は園庭として整備。講義の妨げにならないように〇二歳児中心に使用しよう。新装なった学生会館前のスペース（通称「広場」）も園庭として整備。ダイナミックな活動を展開できる。三〜五歳児はこころを拠点としよう。
- ②その場所が子どもにとって居心地が良く、遊びの場となるためには、穴を掘る、実を集める、入り込むなど、手を加えられることが大切。遊びが豊かになるためには、高

低差や明暗、入り組んだ道など、変化に富んだ空間が欲しい。

- ③キャンパス全体地図を把握し、通行等において注意を要する場所を確認する。出合いが子どもの中に蓄えられ、つながりをもち、深まっていくように、「マップ記録」を積み重ね、自然（樹木・実・花・小さな生き物・四季の変化）の情報を収集しよう。

子どもたちの生き生きした遊びに必要な要素として「高低差」や「自然」「入り込み、手を加えられること」がありました。大学生が過ごす場所として整備されているキャンパスで果たしてそれらのことを実現できるのか、何もわからない状態でこども園はスタートしました。

そして開園から二年目の冬に、広場に大きな山を作ることができたのです。それは、夢のような出来事でした。今思うことは「理想を掲げること」の意味です。そこから始まることがある、と確信しています。

## 山誕生の物語

①残土発見の奇跡―専門家がそこにいたから  
平成二十九年十二月十一日、仙田孝先生（鶴見大学短期大学部）と鮫島良一先生（同）が来園されました。子どもの遊び環境研究の専門家である両先生からアドバイスを頂ける機会なので、園内だけでなく大学キャンパス内も案内することになりました。

子どもたちがよく遊んでいる広場に到着し、普段の遊びの様子を話しつつ、いつかはここに山を作りたいという夢を話しました。「山はいいですね」「池もあるともっといいね」と会話が弾み、「そういえば、あの奥の方に、いい樹があるんですよ。遠回りだけれど見ていきますか」と聞くと、二人は笑顔でうなずきました。そして、この寄り道が、残土との出会いをもたらしたのです。

廃材置き場なので掘り出し物が見つかるから時々見に行くんですよと笑いながら道を進

み、「ほら、立派な樹でしょ。目立たない場所にあるから、時々見てあげないともったいないんです」と紹介し、みんなで樹を見上げました。そのまま視線を移したとき、そこになると、大きな土山があったのです。え？ 何これ？ と見ていると、仙田先生たちが言いました。「きつと工事の残土です」「お願いします、もらえるかもしれませんよ」「捨てられてしまうから、急いだほうがいいですよ」と。その日のうちに施設課に連絡すると、事はトントントン拍子に進んでいきました。



▲記念すべき瞬間。こんなところに土の山。

## ②土山ができた!

十二月十五日、残土との出会いから五日目に、土山は誕生しました。

トラックが二十回以上も往復し土が運ばれます。見守る子どもたちの目にはシヨベルカーやトラックがまるでヒーローのように映ったのではないのでしょうか。

すべてを取り仕切ってくれた現場監督のHさんは、子どもたちが歓声を上げる様子をうれしそうに見てくださり、「ただ土を置いていくだけじゃ、つまらないでしょ」と、頂のような場所を作ってくれました。

土を置く位置を打ちあわせる  
ときから、「うちの孫もちょうど同じくらいなん



▲子どもたちが見守る中、残土が運ばれる。

だよね」「子どもは遊びが大事だね」と話してくれたHさんとの出会いが、山に人肌のよ  
うな温かさを加えてくれたように思います。  
その後も大学内の工事に従事していたHさんは、  
山のそばを通るときにはいつも歩みを止めて  
笑顔を向けてくれ、子どもたちや保育者たち  
も、「Hさん」と呼びかけあったのでした。

## ③それからの日々



広場に着くと山へと一目散に駆け出す子どもたち。みんな山が大好きです。大学附属のいずみナーサリーの子どもたちもたくましく登ってきます。普段、附属幼稚園のお山を登って遊んでいるので実力満点なのでした。

## ～山のそばで過ごす日々～



▲雨上がりには大きな水たまりができる。まるで池のようになりました。



▲粘土質の土は粘りが強く、泥団子作りに最適。土の違いで色合いが変わることに気づき、友達と比べあっています。



▲山のそばにロープ遊具。お父さんたちの力を借りて設置。バランスをとって進みます。



▲広場に小屋ができた！ 用務員の杉浦さんとお父さんたちが力を合わせて。ペンキ塗りは子どもたちも手伝いました。



◀登ったり、走ったり、滑ったり、大好きな山で、この日はアート。山に大きな布をかぶせ、色を付けていく。ローラーを両手に持ってコロコロと、山の上をお散歩。いつもよりも、山のでこぼこを感じながら歩く。端から端まで行ってみる。気づいたら、山にも色を付けていた！

## 夢が広がる「広場」

子どもの遊びを支える環境には「自然スペース」「オープンスペース」「道スペース」「アーキスペース」「アジトスペース」「遊具スペース」が必要であると、仙田満氏は言っています（『こどものあそび環境』筑摩書房

一九八四年）。本園の広場には、もともと「自然」「オープン」「道」の三つがありました。そこに山ができ、ロープ遊具や小屋が加わったことで、あとの三つの要素も加わり、さまざまな動きが引き出され、可能性が広がってきているように思います。

残土発見のときにその活用方法をアドバイスしてくれた子どもの遊び環境研究者、土を運ぶ際に子どもたちのことを思い描き、すてきな山型にしてくれた工事現場の監督、小屋や畑作りを進めてくれた保護者や用務主事、そして、広場を共に愛し活用しているいずみナーサリーの先生たち、元氣いっぱい遊ぶ

子どもたち等、多くの人のかかわりの中で「広場」は豊かに熟成しています。それはこれからも続いていくことと思います。本園のつながる保育は、このような営みの中で実現していくと確信しています。

\*連載を終えるにあたって\*

「こども園をつくる」として、文京区立お茶の水女子大学こども園の記録を十一回にわたり連載しました。区と大学が協働でこども園をつくるという日本初の取り組みについて、立ち上げの経緯、開園当初の混乱や学びについて報告しました。さらに、乳児保育やインクルーシブな保育、食育や子育て支援、教育時間外の保育等、認定こども園ならではのテーマについて報告しました。本園の小さな歩みを記録する機会を頂いたことに感謝し、これからも一歩ずつ歩みを重ねていきたいと思っています。お読みいただいた皆様ありがとうございます。ありがとうございました。

—終わり—